

聞き取りのプロセスにおける漢字の影響

—台湾人日本語学習者（ディクテーション分析）を中心にして—

洪 淑 娟

0 はじめに

言語の学習は、耳から始まるとよく言われている。子どもの言語習得の過程から見れば確かにそうだと考えられる。しかし、外国語を学ぶ、成人学習者の場合にもそれは当てはまるのだろうか。むしろ耳より目を使った視覚型の学習者の方が多いと考えられないだろうか。特に日本語の場合、非漢字圏日本語学習者と比べてみると、台湾人日本語学習者は無意識に漢字に頼りすぎていて、耳から情報を得ようとする意欲が低くなっているように思われる。一方、中国語3805語のうち、46%は日本語と共通ないしは類推可能であると報告されている（新島1963）ことから、中国語の漢字知識を利用することは、日本語の理解に役立つ面もあると言えよう。そこで、本研究では、台湾人日本語学習者を中心として、漢字が聞き取りのプロセスにどのような影響を与えるのかを調べてみたい。

1 先行研究と本研究の方針

1.1 聞き取りのプロセス

聞き取りのプロセスに関しては、フォード丹羽（1996：37）は以下のように提示している。

①音連続を受容 → ②音韻として把握 → ③意味のある単位に切って、それぞれを意味と結び付ける → ④文レベルあるいはテキスト全体の内容を理解

②では音韻の知識が必要であり、③では音韻（韻律的要素）、文法、語彙知識が必要である。③におけるプロセスが最も困難であると考えられるが、音声、文法、語彙知識の中で、語彙知識の有無は、③ひいては④の成功に大きく関与する。未知語あるいは既習語であってもその認知に失敗した場合、正しい区切りができず、その結果、意味理解が成功しないことになる。一方、自然な話し方では、音声は変化したり、前後で融合したりしてくずれる。それを正しく認知するためには、音声知識に支えられた処理能力が必要である。

以上から、音韻の処理能力をはじめ、語彙と文法知識などが聴解力を支えていることが分かる。本研究では、フォード丹羽（1996）の提示した聴解のメカニズムに沿って、最も困難だと考えられる③のプロセスの中で、漢字の知識がどのような影響を与えているのかを、検討して

いきたい。

まず先行研究のうち、中国語話者の聞き取りの問題に関するものを取り上げる。

1.2 中国語話者の聞き取りの問題

中国語話者の日本語学習者にとって、聴解上どのような問題があるのだろうか。以下山本(1997)などの先行研究に基づき、考えていきたい。

まず中国人日本語学習者の音声・音韻上における母語干渉があげられる。それに関して、山本(1997)は次の点を指摘している。それは中国語には、有声・無声破裂子音の対立がないため、日本語の破裂子音の有声・無声の弁別が困難であるということである。そのため、中国人学習者は日本語のパ・タ・カ行を中国語の有気音で、バ・ダ・ガ行を無気音で発音する傾向があり、日本語の「パーバ」「ターダ」「カーガ」の聞き分け・弁別が難しいことである。また、山本(1997)では「多くの中国語系学習者は、この音韻的な母語干渉のために、音声談話の理解が困難で、漢語系語彙への依存度がいっそう強まるという悪循環を起しているようである。その結果、難しい語彙を知っている割に聴解力が低いということになる」ということも述べている。さらに、山本(2000)は、母語に有声・無声の破裂音の対立を持たない中国語話者の日本語の有声・無声破裂音の弁別能力の習得過程、および談話理解のための聴解力との関連について考察した。その結果、日本語の有声・無声破裂音の弁別能力は、国内・国外学習者ともに、学習環境や学習期間にかかわらず、自然習得が困難であることが分かった。また、日本国内の学習者の場合、この識別力の個人差が拡大する傾向が見られ、その差が談話の内容理解のための聴解力にも差をもたらしていると推測された。

山本(1994・1997・2000)は中国人日本語学習者について継続的に調査を行い、母語干渉の問題を音声・音韻の点から見ると同時に、彼らの漢語の知識が聴解に影響を与える場合があるとしている。ただし、上級学習者における聴解力を支える下位知識として、漢語知識は和語知識より弱い寄与の仕方をしてしていると指摘している。例えば山本(1994)では、上級日本語学習者の聴解力は文法知識、和語知識との相関が高いが、漢語系語彙知識との相関は低いとの結果が得られた。その理由としては、和語は常に文法的な機能と関わっていることが述べられている。また、山本(1995)では、漢語系語彙が多用されるという文体上の特徴を持つ「対談」を学習者に聞かせたところ、漢語系語彙知識が多くても理解度の低い学習者が現実にいるという結果が得られた。書き言葉的性格の強いテキストの聴解にも音声、文法、基本的な和語知識が漢語知識以上に重要な言語知識となっていることが分かった。同時に、和語系語彙は漢語より音声変化が起りやすい。例えば、「～っていう」は実際は「～という」という意味である。また、文末の述語の和語は、概して発話速度も速い上に、弱く発音される傾向があることも指摘されている。そのため、漢語知識が高いと思われる中国人日本語学習者は、既知の基本的な和語系語彙であっても、音声知覚での困難を伴い、意味化できない語が多いのではないだろうかと山本は述べている。つまり、中国語話者の日本語学習者は漢語系語彙の知識が高いにもか

かわらず、「音声の即時的な処理能力」が低い可能性もあるのではないかと考えられる。

1.3 音声の即時的な処理能力

「音声の即時的な処理能力」に関しては、小林らが作った「日本語簡易試験 (SPOT)」¹によって測定できる。中国語話者の受験者から「日本語能力簡易試験 (SPOT)」は、やりにくいという意見が出されている。

続いて、小林・山元 (1997) では、日本語学習者のプレースメントテスト (PT) における文法問題及び語彙・漢字問題の得点とSPOTの得点の相関を考察した。〈表1-1〉は中国語話者、韓国語話者、非漢字圏話者など母語別のPT語彙・漢字、PT文法、及びSPOT得点の平均値である。

〈表1-1〉母語別得点の平均値 小林・山本1997:11

母 語	PT語彙・漢字(70点)	PT文法 (90点)	SPOT (30点)
全体 (n=145)	37.98	45.74	14.50
中国語 (n=61)	44.46	46.00	13.02
韓国語 (n=38)	43.14	52.79	19.37
非漢字 (n=46)	25.13	39.57	12.43

()内は配点

〈表1-1〉から、PT語彙・漢字が一番強いのは中国語話者、PT文法に一番強いのは韓国語話者、SPOTで一番得点したのは韓国語話者、いずれの得点も低いのが非漢字圏という傾向が分かる。小林・山元 (1997) は、非漢字圏話者より相対的に漢字・語彙に強い中国語話者は、PTの方がSPOTよりも点を取りやすいと言えそうだと述べている (表1-2)。

〈表1-2〉PT語彙・漢字とSPOT間の得点差の大きい受験者の得点関係 小林・山元1997:14

PT語彙・漢字 > PT文法 > SPOT 19人 全員中国

〈表1-2〉は、PT語彙・漢字とSPOT間の得点標準偏差が10%時点で抽出された19人の得点関係である。興味深いのは、19人全員が中国語話者となっていることである。中国語話者は、語彙漢字力が非常に高いにもかかわらず、SPOT得点の落ち込みが目立つと小林・山元 (1997) で述べられている。

以上のように、中国語話者からSPOTがやりにくいという意見が出ていること及び試験の結果分析などから、中国語話者は、SPOTのような音声の即時的な処理能力が要求されるテストが苦手なようである。

¹ 詳しくは、フォード丹羽・小林・山元 (1995) を参照されたい。

1.4 本研究の方針

前節で、聞き取りのプロセス及び中国語話者の日本語学習者にとっての音声・音韻や語彙面などの問題を見てきた。「聞く」ことは、「話す」、「書く」ことなどとは違い、受容的なプロセスによる活動であり、しかも脳の聴覚処理過程などの複雑な要素も関わってくる。頭の中で何が起きているかを直接観察することができないだけに、音を聴取してから談話を理解するまでのプロセスを知ることは難しいと思われる。したがって、日本語教育の分野において聴解に関する研究は、文法などと比べると進んでいないようである。また、音韻・音声と語彙面から中国語話者の聞き取り上の問題を検討する研究はなされているが、漢字と聞き取りとの関係についての研究はほとんどなされていない。そのため、本研究では先行研究で述べられている中国語話者の音声・音韻、語彙面などの問題を踏まえて、一つの新しい試みとして、中国語話者の聞き取りのプロセスにおいて漢字という要因がどのような影響をもたらしているのかを見ていきたい。

フォード丹羽（1996）による聴解のメカニズムに基づき、以下の仮説を立てた。それは、フォード丹羽（1996）で重要だと考えられた③のプロセスにおいて、漢字の知識が中国語話者の学習者にとってプラスあるいはマイナスに作用する可能性があるのではないかということである。

まず、中国語と日本語の漢字の意味は全く同じか類似していることも多いため、漢字は中国語話者にとって、プラスの作用ををすると思われる。即ち、聞いた音からすぐに当てはまる漢字を連想できれば、理解を促進するのではないかということが考えられる。

例えば、石田（1985）は、同じレベルだと思われる英語・中国語・韓国語を母語とする日本語学習者に聴解、漢字の読み方と書き方、構文・読解のそれぞれの能力をテストするための自作学力テスト（初、中級向き）を実施し、日本語力の母語による差、特に漢字の知識の影響を知ることを目的として、その結果を統計的に分析した。その結果の一つとして、中国語群と韓国語群の漢字力と聴解力の間には強い相関が認められた。

以上のことから、漢字は聞き取りのプロセスで、中国語話者にとってプラスの要因になることが分かる。

一方、同じく石田（1988）によると、学習者に書き取り練習をさせる際に、全文をひらがなで書き取らせてみると、非漢字系学習者の方が正確な場合が多いということも観察されている。漢字圏学習者は普段漢字知識に頼ってあまり音に注意を払っていないため、このような結果になってしまった可能性がある。そうすると、漢字知識は、必ずしもプラスになるとは限らず、逆にマイナスになる場合もあるのではないかと考えられる。

例えば、坂本（1991）には、「上級の場合、聞き取りに関しては聞き取った音に漢字を当てられる場合、漢語を多く知っている漢字系が必ずしも有利とは限らない。聞き取った音を強引に知っている漢語（それは日本語で使わないものである場合もある）にこじつける漢字系の学生より、聞き取りに集中して正確に聞き取った音を辞書をひいて確かめる習慣の付いた非漢字系の

学生の方が正確に言い当てる場合も多い」という指摘がある。また、聞いた音を正しい漢語には当てはめるが、中国語での意味で理解して誤った解釈をしやすとも考えられる。

さらに、中国語話者の学習者は、日本語を学習する際に漢字に頼りすぎた結果、「視覚型」の学習スタイルを身に付け、あまり音に注意を払わなくなるために、音を聞いて意味と結び付けるのに時間がかかることがあると思われる。また、聞いた音に該当する漢語があるかどうか、あるとすればどの漢字を当てはめるのかということを考えてこだわりすぎた結果、後から聞こえてくる内容を聞き落とす場合もありうる。つまり、漢字の存在により視覚情報に依存しすぎてしまい、逆に「音声の即時的な処理能力」は低くなっている可能性もあるのではないかと考えられる。

以上、仮説を支える根拠を述べたが、再び仮説を整理すると以下のようなになる。

〈仮説〉：

聞き取りのプロセスにおいて漢字はプラスとマイナスのどちらの影響も与えている。

- ①プラス：漢字を当てはめることにより、より速く正しく理解できる。
- ②マイナス：文字による視覚情報に頼る学習習慣により、音と意味を結び付けるのに時間がかかることや漢字（表記など）を考えてこだわりすぎた結果、後の内容を聞き落とす傾向がある。

この仮説を検証するため、また漢字がほかにもどのような影響を及ぼしうるのかを調べるため、次章の方法により調査を行った。

2 調査の概要

2.1 調査の目的

前章で述べた仮説を検証するため、また漢字がほかにもどのような影響を及ぼしうるのかを明らかにするため、聴解問題やディクテーション、アンケート、インタビューなどによって調査する。まず、協力者に聴解問題とディクテーションのテスト形式で日本語を聞いてもらう。今回の聞き取りへの漢字の影響については、聴解問題に基づいたアンケート(1)、ディクテーションの回答結果とインタビューによる協力者本人の内省などにより調べる。それと同時に、今回のようなテストだけではなく、専門的な分野の話題や普段の会話など、それぞれ性質の違った内容を日本語で聞く際、どのようなストラテジーを用いるのかについてもインタビューする。また、聴覚型か視覚型かなどの学習モードを知るためのアンケート(2)と協力者の日本語学習背景、日本語学習全体と聞き取りに及ぼす漢字の影響についてなどからなるアンケート(3)も今回の調査に含まれている³⁾。本調査は台湾人日本語学習者にとっての聞き取りのプロセスにおける漢字の影響の実態を非漢字圏日本語学習者との比較を通じて解明することと試み

る。そのため、非漢字圏日本語学習者も調査対象に加える。

2.2 予備調査と結果

本調査を実施する前に、上級レベル日本語学習者の中国人2名、非漢字圏日本語学習者2名（アメリカ人1名、モンゴル人1名）を対象とし、予備調査を行った。

聴解問題に関するアンケート（1）において、4人の中で中国語話者2人と非漢字圏日本語学習者1人（アメリカ人）、の計3人が内容を聞くと、聞いた音に当てはまる漢字を思い浮かべながら理解していると答えた。また、「漢字を考えたり活用したりすることによって、漢字の知識が理解に役立った」というプラス面の回答もあれば、「普段、漢字の発音に注意を払っていないので、音を聞いて意味を結び付けるのに時間がかかることがあった」、「漢字を考えてこだわりすぎた結果、後から聞こえてくる内容を聞き落としたことがあった」などのマイナス面の回答もあった。そして、モンゴル人の協力者は今回のテストではあまり漢字を思い浮かべず、「漢字は聞き取りにあまり影響を与えないと述べた。続いて、ディクテーションをしてもらった際、中国語話者の2人とアメリカ人の協力者には直接漢字で書く傾向が見られたのに対し、モンゴル人の協力者にはかなで書く傾向であった。またその後、そのかなで書いた箇所の漢字を考えてもらったところ、時間がかかり、なかなか思い出せない場合が多かった。しかし、その言葉の意味は分かる」と述べたことから、前述のように、日本語を聞くと、あまり漢字を思い浮かべなかったことが裏付けられていると思われる。即ち、このモンゴル人協力者の場合、漢字がそれほど聞き取りに影響を与えていないことが観察できた。

予備調査から、中国語話者の2人はほぼ同じ結果と意見が集められたが、一方で同じ非漢字圏日本語学習者とは言え、必ずしも同じ方法で日本語を聞いているとは限らないという結果も観察された。そのため、同じ台湾人日本語学習者でも一概に同じストラテジーで日本語を聞くとは言い切れない。したがって、本調査では、日本語を聞くときに漢字を思い浮かべながら理解していくのかどうか、またそれが聞き取りのプロセスにどのような影響を与えているのかを中心にインタビューした。

2.3 本調査

2.3.1 調査の対象

日本語能力上級レベルの台湾人学習者（以下Tグループとする）と非漢字圏学習者（以下Fグループとする）20名ずつを対象とし、2002年7月から9月にかけて調査者と協力者1対1で本調査を行った。Fグループの国籍は、イギリス、ウクライナ、ウズベキスタン、オーストラリア、カザフスタン、スロベニア、タイ、ドイツ、フランス、ベトナム、ミャンマー、モンゴ

² 幅のため、本稿ではストラテジー使用や学習モードなどに関する詳しい調査結果と分析の記述は省くことにする。

ル、ルーマニア、レバノンなど、計14ヶ国である。Tグループは全員が筑波大学在籍の院生または研究生である。また、ほとんどの協力者は来日前台湾で日本語を専攻していた。Fグループの協力者は大学院在籍者のほかは、筑波大学留学生教育センターで行われている日本語補講コースの最もレベルが高いとされる「聴解7」と「文型7」のクラスを受講中の学生であった。日本語能力試験1級合格者は少ないが、これまでの専攻、日本語学習歴や学習時間などから、上級レベルだと判断される。本調査の協力者の日本語学習歴などの詳しい情報は以下の〈表2-1〉と〈表2-2〉の通りである。

〈表2-1〉協力者（Tグループ）

	性別	年齢	専攻	学習歴	母国／日本	日本滞在期間	学習時間	1級
t 1	男	35	社会学	5年／1年		8年3ヶ月	1200～	／
t 2	男	27	環境科学	3年／1年6ヶ月		3年9ヶ月	1200～	○
t 3	女	24	日本文化	3年／5年6ヶ月		5年6ヶ月	1200～	○
t 4	男	33	農林工学	2ヶ月／1年6ヶ月		5年10ヶ月	1200～	／
t 5	女	26	日本文学	4年／1年4ヶ月		3年4ヶ月	1200～	○
t 6	男	27	哲学思想	9年2ヶ月／1年4ヶ月		4ヶ月	1200～	○
t 7	男	27	哲学思想	7年／1年4ヶ月		1年4ヶ月	1200～	○
t 8	女	26	日本語	4年／1年10ヶ月		3年10ヶ月	1200～	○
t 9	男	36	理科教育	2年／2年4ヶ月		2年4ヶ月	1200～	／
t 10	男	27	日本文化	4年／1年4ヶ月		1年4ヶ月	1200～	○
t 11	男	31	システム情報工学	3年／3年4ヶ月		3年4ヶ月	1200～	○
t 12	女	26	教育哲学	3年／3年4ヶ月		3年4ヶ月	1200～	○
t 13	女	24	日本文化	4年／1年4ヶ月		1年4ヶ月	1200～	○
t 14	女	28	哲学思想	3年／2年4ヶ月		2年4ヶ月	1200～	／
t 15	女	23	哲学思想	7年7ヶ月／4ヶ月		4ヶ月	1200～	○
t 16	女	23	経営・政策	6年／4ヶ月		4ヶ月	1200～	○
t 17	女	24	日本語	4年／2年4ヶ月		2年4ヶ月	1200～	○
t 18	女	32	体育学	3年／4ヶ月		4ヶ月	1200～	○
t 19	女	26	日本文化	4年／3年4ヶ月		3年4ヶ月	1200～	○
t 20	男	26	哲学思想	7年6ヶ月／1年4ヶ月		1年4ヶ月	1200～	○

※ Tグループの母語は全員中国語／台湾語である

〈表2-2〉協力者(Fグループ)

性別	年齢	国籍	母語	専攻	学習歴	母国/日本	日本滞在期間	学習時間	1級
f1	女	21	カザフスタン	カザフ語	日本語・日本文化	3年/10ヶ月	10ヶ月	1200~	/
f2	女	23	ベトナム	ベトナム語	日本語・日本文化	3年/1年10ヶ月	1年10ヶ月	1200~	/
f3	男	28	イギリス	英語	政治学	3年/1年	3年8ヶ月	1200~	/
f4	女	28	レバノン	アラビア語	日本文化	4年/3年4ヶ月	3年4ヶ月	1200~	/
f5	男	24	ベトナム	ベトナム語	日本語・日本文化	3年/10ヶ月	10ヶ月	1200~	/
f6	女	21	オーストラリア	英語	日本語・日本文化	3年/10ヶ月	10ヶ月	1200~	/
f7	女	23	ドイツ	ドイツ語	日本学・アメリカ学	3年10ヶ月/10ヶ月	1年6ヶ月	1200~	/
f8	男	20	ウクライナ	ウクライナ語	日本語・日本文化	2年/10ヶ月	10ヶ月	1200~	/
f9	女	22	ベトナム	ベトナム語	日本語・日本文化	3年/10ヶ月	10ヶ月	1200~	/
f10	女	21	モンゴル	モンゴル語	日本語・日本文化	3年/10ヶ月	10ヶ月	1200~	/
f11	女	27	タイ	タイ語	日本語	4年/3年4ヶ月	3年4ヶ月	1200~	/
f12	女	20	ウズベキスタン	タダル語	日本語・日本文化	2年/10ヶ月	10ヶ月	1200~	/
f13	男	23	ドイツ	ドイツ語	日本学・歴史学	3年/11ヶ月	1年	1200~	/
f14	男	35	フランス	フランス語	日本文化	2年/1年	2年4ヶ月	1200~	/
f15	女	34	スロベニア	スロベニア語	日本語	1年/6年6ヶ月	6年6ヶ月	1200~	/
f16	女	23	タイ	タイ語	国際関係	0/1年4ヶ月	3年10ヶ月	1200~	/
f17	女	25	タイ	タイ語	日本語	4年/2年7ヶ月	2年9ヶ月	1200~	○
f18	女	40	ミャンマー	ミャンマー語	日本語	3年/1年	1年	1200~	○
f19	女	24	ルーマニア	ルーマニア語	経済学	0/1年	4年6ヶ月	1200~	/
f20	男	27	タイ	タイ語	物質工学	0/1年	9年6ヶ月	1200~	/

2.3.2 調査の内容³

調査にあたっては、以下の書類、問題、アンケートなどを使用した。以下、それぞれの概要と目的を述べる。

資料1 調査資料利用・公開承諾書

調査資料の収集への協力を依頼し、公開の承諾をもらえる範囲を確認の上、署名を依頼する。

資料2 聴解問題

収録したNHKニュースをもとに作られた問題である。次段階のアンケート(1)で、「日本語を聞くときに漢字を思い浮かべながら理解していくかどうか」ということを答えやすいように、実際に日本語を聞き、設問に答えてもらう。

資料3 アンケート(1)

聴解問題とディクテーションなどに関するアンケートである。特に漢字の影響を中心とし、調査する。

³ 本稿の分析にあたる資料2, 3, 4の詳細は、稿末を参照されたい。

資料4 デイクテーション回答用紙

同じNHKニュースの内容から、12個の漢語に当たる箇所を空欄とし、デイクテーションの項目とする。

資料5 語彙チェック

デイクテーションの該当漢語の意味が分かるかどうかを確認する。

資料6 アンケート (2)

視覚型か聴覚型かなどの学習モードを知るためのアンケートである。

資料7 アンケート (3)

日本語学習歴などの協力者の背景、「漢字と日本語学習全体の関係」、「漢字と聞き取りの関係」について聞くアンケートである。また、調査者の考えに左右されないように、漢字と日本語学習、特に聞き取りの関係については、自由記述してもらおうとした。

3 調査の結果と分析

3.1 聴解問題における漢字の影響

今回の調査において聴解問題は次段階のアンケート (1) のうち、聞き取りと漢字の関わりについての質問 (質問6と質問7) への答えを引き出すという意図で実施された。先に聴解問題を行ったのは、突然「日本語を聞くときに、漢字を思い浮かべますか」と聞かれたら恐らく簡単には答えられないと予想したためである。それよりも、実際に日本語を聞いてからの方が次段階のアンケート (1) にも答えやすくなると思った。本節では聴解問題の回答に関する分析ではなく、それに基づいたアンケート (1) の質問6, 7への回答について分析する。その質問内容と答えの選択肢は以下の通りである。

4 聴解問題の回答結果では、TグループはややFグループより正解率が高いが、大きな差は見られなかった。本研究の分析において、それは重要な部分ではないため、詳しい結果の記述は省くことにする。

質問6. 今回のニュースを聞くときに、(聞いた音に当てはまる)漢字を思い浮かべることがありましたか?

- ①はい ②いいえ

質問7. 今回のテストで、漢字は聞き取りにどのような影響を与えましたか?
(複数可)

- ①漢字の知識が理解に役立った
②普段、漢字の音(発音)に注意を払っていないので、音を聞いて意味と結び付けるのに時間がかかることがあった
③漢字を考えるのにこだわりすぎた結果、後から聞こえてくる内容を聞き落としたことがあった
④その他(自由記述)

※〈資料3〉より

〈表3〉はその集計結果である。

〈表3〉アンケート(1)質問6, 7の集計結果

	6.①	②	7.①	②	③	④
Tグループ (n=20)	20(100%)	0(0%)	11(55%)	8(40%)	10(50%)	2(10%)
Fグループ (n=20)	16(80%)	4(20%)	8(40%)	9(45%)	8(40%)	3(15%)

〈表3〉から、まず質問6.「今回のニュースを聞くときに、(聞いた音に当てはまる)漢字を思い浮かべることがありましたか」に対してTグループは全員が①「はい」と答えたのに対し、Fグループは16人(80%)であることが分かる。続いて質問7.「今回のテストで、漢字は聞き取りにどのような影響を与えましたか」に対して、①の「漢字の知識が理解に役立った」という漢字のプラス面への回答はTグループとFグループでそれぞれ11人(55%)、8人(40%)であり、②「普段、漢字の音(発音)に注意を払っていないので、音を聞いて意味と結び付けるのに時間がかかることがあった」と③「漢字を考えるのにこだわりすぎた結果、後から聞こえてくる内容を聞き落としたことがあった」の漢字のマイナス面への回答の合計はそれぞれ18人(90%)、17(85%)人であった。以上、今回の聴解問題に関するアンケート(1)7.への回答結果では、両グループの間にそれほど差がなかったと言えよう。

3.2 ディクテーション

3.2.1 「漢字傾向」と「かな傾向」

ディクテーションの際、特に「漢字あるいはひらがなで書いてください」という指示をしないで、協力者が自発的に漢字で書くのか、それとも音(かな)のまま書くのかを観察し、ほと

んど漢字で書いた者を「漢字傾向」、かなで書いた者を「かな傾向」とした。以下の〈表4〉はその両グループの結果を表している。

〈表4〉ディクテーションの傾向

	Tグループ (n=20)	Fグループ (n=20)
漢字 傾向	12 (60%)	2 (10%)
かな 傾向	7 (35%)	17 (85%)
漢字・かな半分ずつぐらい	1 (5%)	1 (5%)
合計	20 (100%)	20 (100%)

Tグループは「漢字傾向」60%で、「かな傾向」35%であった。一方、Fグループはそれぞれ10%と85%という結果になった。〈表4〉の結果から、Tグループは明らかに「漢字傾向」が多く、反対にFグループは「かな傾向」が圧倒的に多いことが分かった。

3.2.2 漢字によるマイナスの影響

ディクテーションの内容は2回聞いてもらったが、一回目あるいは二回目も書けなかった箇所を観察・記録し、次段階のインタビューで詳しくその原因を調査した。「書くのが遅かった」、「スピードが速かった」、「その言葉をあまり知らなかった」など、いろいろな原因があげられたが、今回は特に該当項目（あるいは前の項目）に当てはまる漢字を考えていたために、聞き落としたり、書けなかったりした場合に注目した。また、その結果を一回目と二回目に分けて記述する。Tグループ、Fグループそれぞれで、これが原因としてあげられた項目を整理し、以下〈表5-1〉と〈表5-2〉にまとめた。

〈表5-1〉と〈表5-2〉から、一回目に漢字を思い浮かべようとしたために、聞き落としたあるいは書けなかった者は、20人の中で、Tグループが13人（65%）、Fグループが12人（60%）であった。両グループの間に大きな差は見られなかった。ところが、二回目になると、Tグループは同じ理由で聞き落としたあるいは書けなかった者が5人（25%）に減っているのに対して、Fグループはまだ10人（50%）も観察された。

〈表5-1〉漢字を考えたために聞き落とした語 (Tグループ)

	一回目	二回目
t1	②③	③
t2	⑩⑫	/
t3	②⑨	/
t4	/	/
t5	/	/
t6	/	/
t7	/	/
t8	②⑩⑫	⑩
t9	⑤⑧	⑤⑧
t10	②	/
t11	⑧	⑧
t12	⑤⑨	/
t13	⑦	/
t14	/	/
t15	⑤	/
t16	②	/
t17	/	/
t18	①②⑦⑧⑫	①⑦⑧
t19	④⑤	/
t20	/	/
合計	13人 (65%)	5人 (25%)

※ 該当漢語は以下の通りである

- ①学習指導要領 ②削減 ③都道府県
④定着 ⑤発展的 ⑥検討 ⑦改善 ⑧
講師 ⑨補習 ⑩放課後 ⑪施策
⑫自治体

〈表5-2〉漢字を考えたために聞き落とした語 (Fグループ)

	一回目	二回目
f1	/	/
f2	/	/
f3	②⑤⑥⑧⑨	⑤⑧
f4	/	/
f5	/	/
f6	⑦⑩⑫	⑦⑩⑫
f7	⑤	/
f8	/	/
f9	③⑨	③
f10	②⑤⑩	⑤
f11	⑦⑨⑫	⑦⑫
f12	/	/
f13	⑦	⑦
f14	⑤	⑤
f15	/	/
f16	⑤⑦⑧⑩	⑤⑦⑧⑩
f17	/	/
f18	⑤⑨⑫	⑤⑫
f19	⑤⑧	⑤⑧
f20	⑤	/
合計	12人 (60%)	10人 (50%)

※ 該当漢語は以下の通りである

- ①学習指導要領 ②削減 ③都道府県
④定着 ⑤発展的 ⑥検討 ⑦改善 ⑧
講師 ⑨補習 ⑩放課後 ⑪施策
⑫自治体

3.2.3 量的分析と質的分析

ディクテーションが終わった後で、漢字で書いたところにふりがなを振ってもらい、かなで書いた箇所の漢字がもし分かれば、その漢字も書いてもらうことにした。そして、項目(①～⑫)ごとに、音(かな)と漢字の回答を整理し、それぞれの誤答を以下の〈表6-1〉と〈表6-2〉にまとめた。

続いて、〈表6-1〉と〈表6-2〉の誤答数から、問題ごとの誤答率(グループの人数に対する誤答した人数の割合)をまとめた。結果を〈表6-3〉に示す。

〈表6-3〉を見ると分かるように、Tグループはほとんどの項目において誤答率は50%に及ばなかったが、項目①の漢字と項目⑫の音(かな)の誤答率はそれぞれ55%と50%であった。また、項目③、⑦、⑩、⑫は、漢字より音(かな)の誤りが多いことが分かった。一方、Fグループは項目①、⑦、⑩、⑫の音と漢字、また項目②、④、⑤、⑥、⑧、⑨、⑪の漢字の誤答

〈表6-2〉ディクテーションの誤答の一覧表 (Fグループ)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢
f1	× ×	×					× ×	×	×	× ×	×	
f2		×		×		×	×	×	× ×	× ×	× ×	×
f3	× ×	×	× ×		× ×	×	× ×	× ×		× ×	× ×	
f4	× ×	× ×	×		×		×	× ×	× ×	× ×	×	× ×
f5	× ×	×				×	×	×	× ×	× ×	×	× ×
f6	× ×	×	×	×	×	×	× ×	×	×	×	× ×	× ×
f7	× ×	× ×		×		×	×		×	× ×	×	× ×
f8	× ×	×		×		×	×		×		×	×
f9	× ×	× ×	× ×	×		×	× ×	× ×	×	× ×	×	× ×
f10	× ×	×	×	×	× ×			× ×			×	
f11	× ×	×			×		×				× ×	× ×
f12	× ×	×				×	× ×	×	×	× ×	×	
f13	× ×	×		×		×	× ×	×	×	× ×	×	
f14	× ×	× ×		× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
f15	× ×	×	×	×	×	×	×	×	× ×	× ×	×	× ×
f16	× ×	× ×	×	× ×	× ×	×	× ×	× ×	×	× ×	× ×	× ×
f17		×			× ×		× ×	× ×		×	×	× ×
f18	× ×	× ×	×		× ×	×	× ×	×	×	× ×	×	× ×
f19	× ×	×	× ×	×	× ×	×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×
f20	× ×	×		×		×	×	×	× ×	× ×	×	× ×
合計	18 20	6 20	4 8	2 12	7 11	1 15	12 18	8 17	7 16	15 17	7 20	13 15
%	90 100	30 100	20 40	10 60	35 55	5 75	60 90	40 85	35 80	75 85	35 100	65 75

※ 網掛けの部分は、音（かな）は間違えたが、漢字は正しく書けたものである

〈表6-3〉ディクテーションの誤答率の一覧表

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢	音 漢
T	45 45	10 40	30 20	5 15	20 20	0 15	25 20	25 35	30 45	40 25	10 55	50 25
F	90 100	30 100	20 40	10 60	35 55	5 75	60 90	40 85	35 80	75 85	35 100	65 75

⑨補習 → ほっしゅう (1人)

⑩放課後 → ほかごう (1人)

ほかご (1人)

ほうがごう (1人)

⑫自治体 → じじたい (5人)

Fグループ：

③都道府県 → とうどうふけん (1人)

⑦改善 → かいせん (1人)

Tグループの音（かな）の誤りには、長音、濁音、促音、「じ」と「ち」の区別などの音声的な誤りが観察された。また誤答率の高かった「施策」の漢字の誤りとして「試策」「試作」「視察」「自制」「指策」「示唆」「指唆」「私策」「施則」などがあり、「じちたい」の発音の誤りとして「じじたい」「じつたい」「じつだい」「じったい」「じっさい」などが見られた。

一方、Fグループでは、まず「学習指導要領」について、「学習」「指導」は知っているが、「要領」はあまり知らなかったという意見が多かった。しかも、ほとんどの協力者が「学習指導要領」が一つの言葉として使われていることを知らなかった。「改善」の意味は全員が知っていたが、「かいせん」と聞こえた者が7人いた。そして「放課後」ははじめて見たという者や「自治体」の意味をはっきり知らなかったという意見が多かった。

4 考察

4.1 聴解問題とディクテーションから見る漢字の影響

前章3.1で述べたように、聴解問題に基づいたアンケートでは、その語が既知なのか、未知なのかによって多少の差はあるが、Tグループの協力者全員が今回のニュースを聞くときに、聞いた音に当てはまる漢字を思い浮かべたと答えた。そして、前章3.2.1で、ディクテーションの際Tグループは明らかに「漢字傾向」が強いのにに対し、Fグループは圧倒的に「かな傾向」であることが分かった。Tグループの中で、7人が「かな傾向」であったが、ほとんどが理由としては漢字よりかなの方が速く書けるという点をあげた。かなで書くと同時にその言葉の漢字も思い浮かべたと答えたのである。

一方、「かな傾向」の多いFグループでは、かなで書いた箇所の漢字をその後考えてもらうと、時間がかかるあるいは結局思い出せない場合が多かった。しかし、その言葉の意味を知っていることは後の語彙チェックとインタビューにより確認された。それは今回の調査では漢字を思い浮かべながら日本語を理解していったわけではないことを意味していると考えられる。

また、協力者が意識して使用するストラテジーに関するインタビューの結果⁵から、Tグループは既知の語を聞く場合、「音を聞いて意味より漢字が先に思い浮かぶ」、あるいは「漢字と意味が同時に思い浮かぶ」というパターンが最も多く、さらに聞き取りのタイプの違いにかかわらず、未知の語に出会うと、ほとんどの協力者はまず漢字を探し、それによって意味を理解しようとするストラテジーで処理することが分かった。

以上、聴解問題に基づいたアンケートやディクテーションの傾向、ストラテジーの使用状況などの結果から、TグループはFグループより聞き取りのプロセスにおいて漢字を思い浮かべたり活用したりしていることが窺えると思われる。そこで、このことは台湾人日本語学習者にどのような影響を与えているのかを、次の聴解問題に関するアンケートとディクテーションの

⁵ 詳しくは、洪（2003）を参照されたい。

回答の考察によって解明していく。

4.2 聴解問題

まず、聴解問題に基づいたアンケートの回答結果(3.1)では、Fグループと大きい差は出なかったが、Tグループの回答のうち、漢字が「理解に役立った」というプラス面の効果をあげたものが半分以上にのぼった。一方、「普段漢字の発音に注意を払っていないので、音を聞いて意味と結び付けるのに時間がかかることがあった」や「漢字を考えるのにこだわりすぎた結果、後から聞こえてくる内容を聞き落としたことがあった」などのマイナス面について述べた回答も見られた。そこで、これらのマイナスの影響についてその原因を尋ねたところ、こうした回答をした協力者のほとんどは自分が漢字に頼りすぎているためであると答えた。

また、視覚型と聴覚型の学習モードに関する調査結果⁶によれば、Tグループには「授業中、視覚情報がない時、不安を感じることが多い」という視覚型の協力者が多く、目からの情報をもとに外国語を学習する傾向が見られた。さらに中国語と日本語の漢字には意味・用法が似ているものが多いため、台湾人日本語学習者はいっそう漢字の視覚情報に頼ることが考えられる。しかしながら、漢字の視覚情報への依存は決して台湾人学習者に限ったことではない。例えば、前述した聴解問題に関するアンケート(1)では、漢字のプラス面とマイナス面の影響について、非漢字圏日本語学習者からも台湾人日本語学習者と同じぐらいの数の回答が集められた。そして、両グループとも聞き取りの際、もし漢字を考えてこだわりすぎると、聞き逃したり全体の内容が分からなくなったりする恐れがあるため、漢字を考えすぎないようにしていると述べた協力者が多かった。また、それは以前このような失敗した経験からの自己修正だと述べた協力者もいた。

4.3 ディクテーション

ディクテーションに関しては、前章3.2.2で特に漢字を思い出そうとするのが原因で聞き落としたあるいは書けなかったなどの漢字によるマイナスの影響に注目して分析したが、Tグループでは、一回目は漢字を思い浮かべたりしていて、聞き落としたあるいは書けなかった者が13人(65%)いたが、二回目になると、5人(25%)に減っていることから、Tグループにとって漢字という要因は多少マイナスの影響は与えていたが、それほど大きなものではなかったと言える。むしろFグループでは、二回目にもまだ10人(50%)の協力者が同じ状態に止まっていたことから、Fグループの方がこの漢字によるマイナスの影響をより被っていると思われる。また、ディクテーション解答の音と漢字の結果分析(3.2.3)にあるように、Tグループで漢字は正しく書けたが音(かな)は間違えてしまった箇所が17あるのは、Fグループの2箇所と比べて、明らかに多い。そもそも、Tグループは明らかに「漢字傾向」であるという結果であっ

⁶ 詳しくは、洪(2003)を参考されたい。

たが、この17箇所の回答時の状況を観察したところ、最初にかなで書いたのは4箇所にとどまり、残りの13箇所は全部漢字で書かれたものであった。それは石田（1988）が述べられている「学習者に書き取り練習をさせる際に、漢字系学習者は、音の聞き取りは間違えていても、漢字を当てはめさせると正しい漢字を書ける。この点から漢字の知識が聞き取り能力を支えていることが窺える」という点を裏付ける結果である。しかし、音聞き間違えていても、正しい漢字が書けるということも意味深いと考えられる。普通、ディクテーションのようなテストでは、漢字さえ書ければ得点できることから、メリットになることもあるが、一方それが日本語の総合的な学習の上ではデメリットにもなってしまう可能性もある。例えば、前述の漢字は正しく書けたが音（かな）は間違えてしまった17箇所の中で、長音、濁音、促音、「じ」と「ち」の区別などの音声的な誤りが観察された。こうした結果になってしまった原因としては、先行研究で見られるような母語の音韻干渉などによる可能性もあると考えられるが、まとめたアンケートの回答結果で「漢字に頼って発音を気にしなくなる」という意見も出ているように、漢字の視覚情報に依存しすぎてしまい、発音の方を軽視しがちになっているという可能性もあると思われる。

以上、聴解問題に基づいたアンケートとディクテーションの結果から、Tグループにおける漢字の影響を見てきた。再び本論文の第1章であげられた仮説を振り返ると：

「聞き取りのプロセスにおいて漢字はプラスとマイナスのどちらの影響も与えている。

- ①プラス：漢字を当てはめることにより、より速く正しく理解できる。
- ②マイナス：文字による視覚情報に頼る学習習慣により、音と意味を結び付けるのに時間がかかることや漢字（表記など）を考えてこだわりすぎた結果、後の内容を聞き落とす傾向がある。」

聞き取り活動は受容的であるため、頭の中で実際にどのようなプロセスで処理しているのかを直接観察することは困難だと考えられるため、以上の仮説をさらに厳密に検証する方法は今後の課題にしたいと考えるが、今回の調査においては、協力者本人の内省によるアンケートとインタビューといった間接的な方法で検証した。アンケートとインタビューによって、仮説で述べた聞き取りのプロセスでの漢字のプラスとマイナスの影響についての意見をそれぞれ求めた。また、ディクテーションでの回答から、漢字によるマイナスの影響はあまり働いていないという結果が得られた。そして、音聞き間違えても漢字さえ書ければ正答になるという漢字のプラスの効果も見られたが、その反対に今回の調査で見られたような音韻上の誤りの問題も重視すべきだと考えられる。

5 おわりに

5.1 結論

本研究では、聞き取りのプロセスにおける漢字の影響を、聴解問題、ディクテーション、ア

ンケート、インタビューなどにより調査した。また、それらの調査結果に基づき、分析・考察を行った。それにより、以下のような知見が得られた。

まず、聴解問題に基づいたアンケートやディクテーションの傾向、ストラテジーの使用状況などの結果から、台湾人日本語学習者は非漢字圏日本語学習者より聞き取りのプロセスにおいて漢字を思い浮かべたり活用したりすることが多く見られることが分かった。このことは台湾人日本語学習者にとってプラス面とマイナス面のどちらの影響も及ぼしうるという結果となった。例えば、漢字の知識の活用が理解を促進する効果については聞き取りにおいても同様に見られることが今回の調査で確認された。しかしながら、こうした漢字の効果の高さは反面において、漢字の視覚情報に対する過度の依存を生む。その結果、発音の方は軽視となり、聞き取りの際、音を聞いて意味と結び付けるのに時間がかかることや、聞いた音に漢字があるかどうか、あるとすれば、どの漢字を当てはめればよいのかななどを考えてこだわりすぎるために、後から聞こえてくる内容を聞き落としやすいことなどのマイナスの影響も見られた。

そして、ディクテーションのようなテストにおいて、音を正しく聞き取れなくても、あるいはそもそも該当漢字の読み方を正確に知らなくても、正しい漢字さえ書けば得点できることはその場においてメリットととらえられがちである。学習者は漢字の発音を軽視しがちになり、正確な発音を確認するという習慣が身に付かないため、次第に発音面の正答率が低くなってしまふことが考えられる。テストの際、得点できるという点も含めて、日常生活の中で漢字を見て意味を推測、理解できる点は大きなメリットであるが、一方で音声面で正確さを欠くと、人とのコミュニケーションをするとき、うまくいかないこともありうる。

このように、漢字が台湾人日本語学習者の聞き取りのプロセスに及ぼす影響には、プラスとマイナスの「両面性」があることが明らかなのである。

5.2 今後の課題

本研究においては、まだ多くの課題が残されていると思われる。そこで、本節では、今後の課題とともに、若干の所見を述べたい。

まず、前章でも述べたように、「聞く」・「読む」という受容面は、「話す」・「書く」という言語の産出面に比べて、頭の中で何が起きているかを直接観察可能な手があり（例：発話、作文など）が少ないため、そのプロセスを知ることは困難である。本研究での聞き取りのプロセスにおける漢字の影響に関する仮説を、アンケートやインタビューを通じた協力者本人の内省という間接的方法で検証したが、より客観的かつ厳密にその仮説を実証する方法を再考することがこれからの大きな課題だと考えられる。したがって、学習者の音声認知や理解のより詳細な研究も必要であろう。近年では認知心理学の分野の研究もますます進んでいるが、音を聴取して理解するまでのプロセスについて、認知心理学の側面からの検討も加えられれば、聞き取りのプロセスと漢字の処理のメカニズムにおける影響などをより詳しく解明できると思われる。

今回の調査対象者は上級日本語学習者のみであった。その理由としては、上級者に漢字がどのような影響を与えているのかを検討し、それを踏まえた上で、初級レベルからの指導を考えていく方が効率よく聴解力を伸ばすことができるのではないかと考えたからである。しかしながら、漢字の聞き取りのプロセスにおける影響については、アンケートによりプラス面とマイナス面どちらの働きもそれぞれあげられていたが、3.2.2のディクテーションの結果を見ると、台湾人日本語学習者には漢字によるマイナスの影響はあまり働いていないようであった。それは調査対象となった上級日本語学習者が、語彙などの知識をほぼ獲得していたため、漢字という要因がそれほど影響しなかった可能性がある。したがって、上級ばかりではなく、初級、中級レベルの学習者を対象とした調査も行う必要がある。また、今回の調査で行われたアンケートとインタビューなどの結果は、20人という小規模のグループからの結果であるため、個人差が反映したことが考えられる。そのゆえ、よりの確な結果を得るために、さらに多人数を対象とした調査が必要となる。それによって、台湾人日本語学習者にとっての聞き取りのプロセスにおける漢字の影響をより明確に究明できると思われる。

〈参考文献〉

- 石田敏子 (1985) 「英語・中国語・韓国語圏別日本語学力の分析」『日本語教育』58号 日本語教育学会
- 石田敏子 (1988) 『日本語教授法』大修館書店
- 小林典子・丹羽順子・山元哲史 (1994) 「日本語能力簡易試験としての『聞きテスト』-解答形式の漢字要因に関する分析-」『筑波大学留学生教育センター 日本語教育論集』第9号
- 小林典子・山元哲史 (1997) 「日本語能力の測定-学習者特性とSPOT得点の関係-」『筑波大学留学生教育センター 日本語教育論集』第12号
- 坂本恵 (1991) 「中上級における音声言語指導」『講座日本語教育』第26分冊 早稲田大学日本語研究教育センター
- 新島純良 (1963) 「中国語基本語彙と語彙教育」『紀要』早稲田大学語学教育研究所
- 日本語教育学会編 (1995, 1998) 『日本語能力試験の概要1994年版, 1997年版』国際交流基金 日本国際教育協会
- フォード丹羽順子・小林典子・山元哲史 (1995) 「『日本語能力簡易試験 (SPOT)』は何を測定しているか-音声テープ要因の解析-」『日本語教育』86号 日本語教育学会
- フォード丹羽順子 (1996) 「日本語学習者による聴解ディクテーションに現れた誤りの分析-文法及び音声の側面に焦点を当てて-」『筑波大学留学生教育センター 日本語教育論集』第11号
- 山本富美子 (1994) 「上級聴解力知識の分析-その階層化構造について-」『日本語教育』82号 日本語教育学会
- 山本富美子 (1995) 「講義, 対談等の聴解のメカニズム-テキスト分析を通して-」『日本語教育』86

号 日本語教育学会

山本富美子 (1997) 「母語干渉による異文化間コミュニケーション上の問題－中国系日本語学習者の中間言語分析より－」『富山大学人文学部紀要』第26号

山本富美子 (2000) 「中国人日本語学習者の有声・無声破裂音と聴解力の習得研究－北方方言話者に対する聴取テストの結果より－」『日本語教育』104号

洪 淑娟 (2003) 「聞き取りのプロセスにおける漢字の影響－台湾人日本語学習者を中心に－」筑波大学地域研究研究科15年度修士論文

〈資料2〉

この資料は日本語の聞き取りを分析するに使いたいと思います。学力のテストではないので、どうぞ、お気軽にお答えください。

● 以下の質問に答えてください。(できれば詳しく書いてください)

1. この四月から、どんな教育委員会が増えていることがわかりましたか？

2. NHKはどんなアンケートを行いましたか？

3. 新年度、秋田県と京都市はそれぞれどんな計画を立てていますか？

①秋田県：

②京都市：

〈資料3〉

アンケート (1)

1. ニュースの内容は難しいと思いましたか？

- ①非常に難しかった ②難しかった ③どちらとも言えない
④あまり難しくなかった ⑤全然難しくなかった

2. 難しいところがあるとすれば、どこが難しいと思いましたか？(複数可)

- ①発音がはっきりしていなかった ②知らない単語が多かった
③スピードが速かった ④テーマについての知識が足りなかった
⑤内容がうまく整理できなかった

⑥その他 _____

3. 内容はどのぐらい聞き取れましたか？

- ①100% ②90%以上 ③70%~80%ぐらい
④50%~60%ぐらい ⑤50%以下

4. ディクテーションについて、どう思いましたか？

- ①非常に難しかった ②難しかった ③どちらとも言えない
④あまり難しくなかった ⑤全然難しくなかった

5. 語彙チェックについて、どう思いましたか？

- ①非常に難しかった ②難しかった ③どちらとも言えない
④あまり難しくなかった ⑤全然難しくなかった

6. 今回のニュースを聞くときに、(聞いた音に当てはまる)漢字を思い浮かべることがありましたか？

- ①はい ②いいえ

7. 今回のテストで、漢字は聞き取りにどのような影響を与えましたか？(複数可)

- ① 漢字の知識が理解に役立った
② 普段、漢字の音(発音)に注意を払っていないので、音を聞いて意味と結び付けるのに時間がかかることがあった
③ 漢字を考えるのにこだわりすぎた結果、後から聞こえてくる内容を聞き落としたことがあった
④ その他 _____

● このテストでやりにくかったところや他に感想、意見があれば、何でも教えてください。

〈資料4〉

2002年3月23日（土） 夜7時 NHKニュース

全国の小学校や中学校では、この四月から新しい(① 学習指導要領)が実施されて、学習内容や授業時間が大幅に(② 削減)されますけれども、独自に教材を作成して新たに学力テストを実施するなど、学力の向上に力を入れる教育委員会が増えていることが分かりました。

NHKは今月全国の(③ 都道府県)と政令指定都市の教育委員会に小学生や中学生の学力向上の取り組みについてアンケートを行いました。それによりますと、新年度、基礎的な内容の(④ 定着)や教科書を越えた(⑤ 発展的)な内容の指導のために、独自に作成した教材を使う教育委員会は、宮城県など12の県と市にのほり、8つの府と県市でも、作成を(⑥ 検討)していることが分かりました。

また、指導の(⑦ 改善)をはかろうと一部の子供達を対象に調査のための学力テストを実施するところは、新年度、新たに大阪府など12の府と県市が加わって、合わせて28の都府県と市にのほります。さらに、秋田県が学校五日制の実施で、毎週休みになる土曜日に、ひじょうきん(⑧ 講師)が希望する小中学生に(⑨ 補習)をするほか、京都市も(⑩ 放課後)や夏休みなどに学習教室を開くことを計画しています。

子供達の学力向上をめぐるっては、市区町村でも、独自の(⑪ 施策)をうちだすところがあって、(⑫ 自治体)によって、受けられる教育に差が出そうです。